

研 究

未就学児の保護者のメディア・リテラシーにおける
基礎的情報能力に関する研究住吉 智子¹⁾, 脇川 恭子²⁾, 五十嵐真理³⁾, 田中 美央¹⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は、就学前の子どもをもつ保護者の、メディア・リテラシーの基盤となる基礎的情報能力の実態とその関連要因を明らかにすることである。

研究対象の保護者168人の基礎的情報能力の平均得点と標準偏差は、 112.05 ± 17.26 点であり、大学生とほぼ同程度の情報活用能力を有していた。特に基礎的情報能力総得点と情報活用の自己評価が高い保護者は、子育ての自信度も高いことが明らかとなった。

子どもへの情報機器の使用、早期からの情報教育の賛否については、基礎的情報能力得点の下位尺度の「判断力」が高い保護者は、子どもに情報機器を扱わせることに賛成であり、情報の「収集力」が高い保護者は、より早期からの情報教育に賛成していた。

Key words：メディア・リテラシー、就学前の子どもをもつ保護者、基礎的情報能力

I. はじめに

日本におけるインターネットの利用者数は、平成25年総務省による情報通信白書によると、9,652万人、人口普及率は79.5%と報告されており、年々増加傾向、および低年齢化している¹⁾。保護者のインターネットの活用も多く、子育て情報の収集にインターネットを利用して乳児の保護者は約8割存在するとの報告がある²⁾。近年では、核家族化や地域のつながりの希薄化などにより、子育てが孤立化し、育児情報、健康情報などをインターネット情報に頼る保護者も少なくない³⁾。しかし、インターネット情報は雑多な情報が存在することから、これらの真偽が問われる情報に混乱する保護者も多いことが懸念されている。現代社会では、インターネットが子どもに及ぼす影響が懸念さ

れており、未就学児がいる保護者が子どもの情報機器の所持をどのように考えているのか、保護者自身は、情報の収集力、判断力をどの程度有しているのか、疑問が生じていた。

情報を適切に収集し、批判的に吟味して利用できる力は、メディア・リテラシー(Media Literacy)と呼ばれる能力である。情報教育分野で用いられているメディア・リテラシーの指標として、「情報活用の実践力尺度」がある⁴⁾。この尺度は、「収集力」、「判断力」、「表現力」、「処理力」、「想像力」、「発信・伝達力」の6領域から構成され、中学生から青少年を対象として広く実施されている。しかし、就学前の乳幼児を育てている保護者に対する情報活用の実践力に関する研究はほとんど行われていない。

今後ますます進行する情報化社会に合わせた育児支

Study of the Basic Information Capability as the Media Literacy of Parents with Pre-school Children

[2636]

Tomoko SUMIYOSHI, Kyoko WAKIKAWA, Mari IKARASHI, Mio TANAKA

受付 14. 5. 7

1) 新潟大学医学部保健学科 (研究職 / 看護師)

採用 15. 4. 5

2) 新潟県教育庁保健体育課 (養護教諭)

3) 新潟大学大学院保健学研究科前期課程 (看護師)

別刷請求先：住吉智子 新潟大学医学部保健学科 〒951-8518 新潟県新潟市中央区旭町通2-746

Tel/Fax：025-227-0945

援や生活支援の基盤とするため、われわれは、未就学児を育てている保護者の、メディア・リテラシーの基礎的能力の実態および、その関連要因を明らかにすることを本研究の目的とした。

II. 研究方法

1. 調査対象・方法

2013年7～9月の間に、A県B市内の保育所7ヶ所の未就学児の保護者587人を研究対象とした。方法は、研究の趣旨と目的、倫理的配慮を記した研究協力依頼文書、質問紙と返信用封筒を同封し、保育所を通して配布した。なお本調査は無記名性、任意性を確保し、個人が特定できないよう配慮した。回収は郵送法とした。質問紙の返送をもって、協力の同意ありとした。本研究は、新潟大学医学部保健学科看護学専攻研究倫理委員会の承認を得て実施した。

2. 調査内容

1) 対象者の属性

性別、年代、子どもとの関係、職業の有無等について回答を求めた。

2) 基礎的情報能力

「情報活用の実践力尺度」⁴⁾の6領域のうち、「収集力」、「判断力」、「処理力」の3領域、計26項目を「基礎的情報能力の下位尺度」として回答を求めた。これらは7段階のリッカート・スケールであり、点数が高値であるほど能力が高いことを示している。

3) インターネット利用実態

利用する情報機器、利用頻度、利用する時間帯、利用内容等について選択式で回答を求めた。

4) インターネット利用に関する主観的評価

「インターネットを上手に活用できる」、「内容を吟味して利用できる」等の5項目について、「5：かなり思う」～「1：全く思わない」の5段階のスケールとして回答を求めた。

5) 育児情報と、子どもへのインターネットの考え方

「子どもに早い時期からパソコンや携帯電話等（以下、情報機器）に慣れさせたほうが良いか」等の5項目について、「5：かなり思う」～「1：全く思わない」の5段階のスケールとして用いた。

6) その他

外出頻度、相談相手の有無、子育ての自信度など選択式で回答を求めた。子育ての自信度は、自信がある

ほど高いとして、0～25%、25～50%、50～75%、75～100%の4項目の選択式で回答を求めた。

3. 分析方法

基礎的情報能力の内的整合性をCronbach's α 係数で評価したところ、総得点では0.851で、下位尺度の信頼性係数が、「収集力」0.602、「判断力」0.776、「処理力」0.757となった。判断力、処理力ともに0.7以上であり、本研究での使用は妥当であると判断した。

データの解析方法については、ExcelおよびSPSS.21J.for.windowsを用いて集計および解析を行った。基礎的情報能力得点ならびに下位尺度と、各要因の関係については、 χ^2 検定、t検定、一元配置分散分析を行った。主観的評価ならびに育児情報と、子どもへのインターネットの考え方については、Spearmanの順位相関係数を用いた。「子どもに早くから情報機器に慣れさせたいか」と「子どもに早くからインターネットの使い方や安全性を学校や家庭で教えるべきか」の設問について、「どちらともいえない」を除く、「賛成群」と「反対群」の2群間で、Mann-WhitneyのU検定を実施した。いずれも5%水準で統計的有意とした。

III. 結 果

質問紙配布587人中、回答は169人（回収率28.8%）であった。そのうち、基礎的情報能力に欠損がない168人を分析対象とした（有効回答率99.4%）。

1. 対象者の属性

対象者は、母親155人（92.3%）、父親13人（7.7%）であった。年代は「30代」が110人（65.5%）と最も多く、「40代以上」が47人（28.0%）、「20代」が11人（6.5%）であった。職業は、97%は何らかの形で就業しており、「専業主婦・無職」は、5人（3.0%）のみであった。

2. 対象者の年代別基礎的情報能力各得点と下位3因子の得点（表1）

対象者の年代別に、「基礎的情報能力」各項目の平均値と標準偏差を表1に示した。有意差を示した項目は「2 判断力」の「12) 人の噂をすぐ信じるほうだ」と「13) 新聞やテレビで言われていることをすぐ信じるほうである」（どちらも逆転項目）であり、30代の対象者が有意に高値であった。しかし、「収集力

表 1 年代別基礎的情報能力項目の平均値の比較

n=168

基礎的情報能力尺度	全体		20代 (n=11)		30代 (n=110)		40代以上 (n=47)		p 値
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
1 収集力									
1) 興味を持った事柄については、徹底的に情報を集める	5.18	(1.45)	6.18	(0.87)	5.10	(1.47)	5.15	(1.44)	.06
2) わからないことがあっても、人に質問したり、本や辞書で調べることはほとんどない (※)	5.54	(1.29)	5.00	(1.88)	5.52	(1.33)	5.70	(1.04)	.26
3) 資料は自分で集めずに、友だちからもらって済ますことの方が多い (※)	5.57	(1.40)	5.55	(1.86)	5.55	(1.45)	5.70	(1.04)	.92
4) わからない事柄があったら、辞書や辞典をひくようにしている	4.35	(1.77)	4.45	(1.70)	4.25	(1.73)	4.53	(1.86)	.65
5) 新しい品物を購入するときは、まずはカタログや雑誌を収集する	4.15	(1.62)	4.73	(2.14)	4.09	(1.63)	4.17	(1.48)	.46
6) 自分から進んで調べ物をすることは少ない (※)	5.43	(1.46)	5.64	(1.80)	5.35	(1.51)	5.57	(1.27)	.61
7) 話題になっている本や雑誌には、目を通すようにしている	3.15	(1.49)	3.64	(1.85)	3.09	(1.49)	3.17	(1.39)	.51
8) 人から聞いて初めて知る話が多い (※)	4.12	(1.23)	4.27	(1.42)	4.23	(1.21)	3.85	(1.22)	.19
9) 新聞やテレビのニュースを、あまり見ないほうだ (※)	4.76	(1.75)	4.91	(2.30)	4.73	(1.75)	4.79	(1.64)	.94
10) 何でもひととおり知っていたいという気持ちだが、人一倍強い	3.54	(1.61)	3.55	(1.37)	3.6	(1.65)	3.38	(1.59)	.74
収集力 計	45.76	(7.11)	47.91	(4.18)	45.46	(7.36)	46.0	(7.11)	.54
2 判断力									
11) 人から聞いた話が本当かどうかを、後で確かめることはない (※)	4.49	(1.40)	4.09	(1.38)	4.61	(1.38)	4.3	(1.44)	.27
12) 人の噂をすぐ信じるほうだ (※)	4.40	(1.40)	3.36	(1.12)	4.56	(1.39)	4.26	(1.40)	.02*
13) 新聞やテレビで言われていることをすぐ信じるほうである (※)	3.98	(1.47)	3.27	(1.56)	4.25	(1.44)	3.53	(1.38)	.00**
14) テレビで知ったことを、後から本などで確認することがある	3.76	(1.55)	4.09	(1.81)	3.82	(1.58)	3.55	(1.39)	.47
15) 手に入れた情報が古くなっていないかどうか注意している	3.57	(1.50)	3.00	(1.09)	3.69	(1.53)	3.43	(1.47)	.26
16) 対立する意見があるときはいつも、両方の言い分を聞いてそれぞれの良し悪しを判断するようにしている	5.06	(1.19)	4.82	(1.99)	5.08	(1.15)	5.06	(1.05)	.78
17) 噂を聞いたときには、それがどのくらいの根拠があるかを確認している	4.17	(1.39)	3.82	(1.53)	4.25	(1.37)	4.09	(1.41)	.55
18) たくさんの資料から必要な情報を見つけ出すのは苦手である (※)	4.27	(1.43)	4.18	(0.87)	4.21	(1.37)	4.43	(1.23)	.67
判断力 計	33.70	(7.11)	30.64	(5.37)	34.45	(7.34)	32.64	(67.00)	.11
3 処理力									
19) 問題を解くとき、筋道を立てて考えるよりは、思いつきで結論を出すことが多い (※)	4.43	(1.41)	4.09	(1.58)	4.33	(1.40)	4.77	(1.37)	.14
20) 多くの資料を検討して、結論を導くのは得意である	3.93	(1.41)	3.73	(1.80)	3.98	(1.47)	3.85	(1.18)	.77
21) 意見がたくさんあっても、うまくまとめることができる	3.87	(1.36)	4.09	(1.30)	3.90	(1.41)	3.74	(1.26)	.69
22) 長い文章でも、その要点はたいいてい把握できる	4.48	(1.37)	4.36	(1.30)	4.45	(1.46)	4.55	(1.12)	.88
23) 筆者が一番言いたいことを把握するのは苦手である (※)	4.39	(1.34)	3.55	(1.29)	4.43	(1.36)	4.51	(1.23)	.08
24) 多くの情報から、共通点を見つけ出すのは苦手である (※)	4.52	(1.24)	4.45	(1.04)	4.53	(1.28)	4.51	(1.21)	.98
25) 図や表にまとめられた資料から、共通点や一定の法則を見つけ出すことが得意である	3.98	(1.35)	3.45	(1.03)	3.98	(1.38)	4.11	(1.34)	.36
26) 品物を選ぶとき、たくさんのカタログを見て比較検討することはない (※)	3.09	(1.41)	3.18	(1.47)	2.95	(1.46)	3.38	(1.24)	.21
処理力 計	32.69	(6.58)	30.91	(6.49)	32.55	(6.80)	33.43	(6.10)	.49

注 1) (※) は逆転項目である。 注 2) 年代別一元配置分散分析を実施した。

* : $p<.05$, ** : $p<.01$

(10項目)」、「判断力(8項目)」、「処理力(8項目)」それぞれの下位尺度合計の平均値では、3尺度ともに年代別で有意な傾向は認めなかった。なお、総得点の平均値±SDは、112.17±17.15点、最大値167点、最小値74点であった。対象者全体での下位尺度は「収集力」45.76±7.11点、「判断力」33.70±7.11点、「処理力」32.69±6.58点であった。

3. インターネット利用実態と、基礎的情報能力との関連(表2)

各関連要因と基礎的情報能力総得点の関連を表2に示した。対象が利用する情報機器は、最も多かったのは、多機能型携帯電話(以下、携帯電話)・タッチパネル式で操作できる次世代携帯電話機スマートフォン(Smartphone:以下、スマホ)と、パーソナルコンピューター(Personal computer:以下、パソコン)の「両方使用」が113人(67.2%)と過半数を占め、「携帯電話・スマホ」48人(28.6%)、「パソコン」5人(3.0%)の順に続いた。「全く利用しない」は2人(1.2%)であった。インターネットを利用するときの情報機器は、「携帯電話・スマホ」と「パソコン」で、ほぼ半数ずつの割合であった。

子どもと一緒に外出する頻度は、「週1～3日」118人(70.2%)が最も多く、「ほぼ毎日外出」44人(26.2%)、「ほぼ家にいる」6人(3.6%)であった。対象者の子育ての自信度を0～100%(自信があるほど高い)の4項目で尋ねたところ、最も多かったのは「50～75%の自信あり」70人(41.7%)であり、続いて「25～50%の自信あり」67人(39.9%)、「0～25%の自信あり」18人(10.7%)であった。最も少なかったのは、自信度の高い「75～100%の自信あり」13人(7.7%)であった。

対象の家族形態や職業、子どもの数などの基本的属性と基礎的情報能力の総得点で有意差は認めなかった。また、情報機器の利用実態においても「普段利用する情報機器」、「インターネット利用時の情報機器」の違いでは、基礎的情報能力に有意差は認められなかった。

「インターネットの利用頻度」と「利用時間」に有意差が認められた。「インターネットの利用頻度」においては、「ほぼ毎日」利用している人ほど基礎的情報能力が有意に高く($p < .01$)、下位因子においても「収集力/判断力/処理力」の得点で各々有意差が認めら

れた($p < .01/p < .01/p < .05$)。

「インターネット利用時間」では「1～2時間未満/日」利用している人は、「1時間未満」と「2時間以上」の人よりも有意に基礎的情報能力が高かった($p < .05$)。下位因子では、「判断力」に有意差が認められた($p < .05$)。

育児状況では、「子育ての自信度」と基礎的情報能力に関連が認められた。「75～100%の自信あり」と回答した人は、有意に基礎的情報能力が高値であった($p < .01$)。下位尺度では、「判断力/処理力」で有意差が認められた($p < .01/p < .01$)。

4. 主観的要因と基礎的情報能力との関連(表3)

対象者の「情報活用の自己評価」と「育児情報入手と子どもへのインターネット利用の考え方」を主観的要因とし、基礎的情報能力との関連を検討した。「情報活用の自己評価」では、「自分はインターネットを上手に活用できる」($r = .30, p < .01$)、「自分は内容を吟味して利用できる」($r = .41, p < .01$)、「自分は、情報通信技術(Information and Communication Technology: 情報通信技術, 以下、ICT)は得意なほうだ」($r = .34, p < .01$)の3項目で有意差を認め、基礎的情報能力が高い人は、これら3項目も高値である傾向が認められた。

「育児情報入手と子どもへのインターネット利用の考え方」では、対象者の基礎的情報能力と「育児情報の入手は信頼性に気をつけている」($r = .17, p < .05$)に弱の正の関連が認められた。

5. 子どもへの情報機器、情報教育の考え方と基礎的情報能力との関連(表4, 5)

「子どもに早くから情報機器に慣れさせたいか」の設問について、「どちらともいえない」を除く117人中、「かなり思う」、「まあまあ思う」を子どもの早期情報機器使用の「賛成群」、「あまり思わない」、「全く思わない」を「反対群」としたところ、「賛成群」は28人(23.9%)、「反対群」は89人(76.1%)であった。基礎的情報能力の総得点では有意差は認めなかったが、下位尺度の「判断力」で有意差を認め、「判断力」が高い人は、子どもに早期から情報機器に慣れさせることに賛成していた($p < .05$)。

上記と同様に「子どもに早くからインターネットの使い方や安全性を学校や家庭で教えるべきか」の設問

表 2 基本的属性・背景要因と基礎的情報能力総得点との関係

n=168

基礎的情報能力総得点						基礎的情報能力総得点					
n	(%)	平均	SD	t値 or F 値	p	n	(%)	平均	SD	t値 or F 値	p
1 対象の基本情報											
1) 子どもとの関係 a						4) 職業					
母親	155	92.3	111.70	17.58	1.40 .24	フルタイム・会社員等	102	60.7	113.74	17.84	1.63 .18
父親	13	7.7	117.54	11.84		パート・アルバイト	49	29.2	109.53	14.14	
						在宅ワーク・自営業	12	7.1	113.33	22.63	
						専業主婦・無職	5	3.0	99.20	15.06	
2) 年代						5) 子どもの数					
20代	11	6.5	109.50	10.69	.17 .85	1人	63	37.5	111.81	15.27	.32 .81
30代	110	65.5	112.47	18.18		2人	71	42.3	113.30	18.79	
40代以上	47	28.0	112.02	16.03		3人	31	18.4	110.06	18.43	
						4人以上	3	1.8	108.00	7.00	
3) 家族形態 a											
核家族	129	77.2	113.53	16.60	1.58 .05						
拡大家族	38	22.8	107.37	19.01							
2 情報機器利用実態						3 育児状況					
1) 普段利用する情報機器						1) 子どもと一緒にの外出頻度					
携帯電話・スマホ	48	28.6	107.56	16.86	1.83 .14	ほぼ毎日外出	44	26.2	113.23	16.08	2.72 .06
パソコン	5	3.0	107.40	15.04		週1～3日	118	70.2	112.42	17.41	
両方	113	67.2	114.20	17.26		ほぼ家にいる	6	3.6	96.17	17.63	
全く利用しない	2	1.2	109.50	21.92							
2) インターネット利用時の情報機器						2) 育児の相談相手の人数					
携帯電話・スマホ	85	51.5	109.86	16.47	1.41 .25	3人以上	75	44.6	115.08	18.43	2.50 .09
パソコン	79	47.9	114.39	18.11		1～2人	63	37.5	108.52	16.06	
その他	1	0.6	112.00			0人	30	17.9	111.87	15.68	
3) インターネット利用頻度						3) サークル参加					
ほぼ毎日	124	74.7	114.98	16.60	7.48 .00**	週1回以上	8	4.9	119.38	7.35	1.30 .28
週2～3日	23	13.9	104.22	17.62		時々参加	117	70.1	110.77	17.92	
ほとんど利用しない	19	11.4	102.68	15.63		参加したことはない	42	25.0	113.98	16.54	
4) インターネット利用時間						4) 子育ての自信度					
1時間未満	93	56.4	108.96	16.05	3.98 .02**	0～25%	18	10.7	105.22	19.29	4.80 .00**
1～2時間未満	41	24.8	117.56	16.36		25～50%	67	39.9	109.97	14.07	
2時間以上	31	18.8	114.39	20.41		50～75%	70	41.7	113.06	18.03	
						75～100%	13	7.7	126.77	18.04	
5) インターネット利用時刻											
0～6時	5	3.1	116.20	34.13	1.58 .20						
6～12時	18	10.9	119.00	17.92							
12～18時	53	32.1	113.06	17.27							
18～24時	89	53.9	109.93	15.87							

注 1) a 設問は t 検定, それ以外の項目は一元配置分散分析。 注 2) 無回答は, 統計から除外した。
*: $p < .05$, **: $p < .01$

表 3 主観的要因と基礎的情報能力得点の関連

情報活用の自己評価	基礎的情報能力		
	n	r	p
1. 自分はインターネットを上手に活用できる	165	.30	.01 **
2. 自分は内容を吟味して利用できる	165	.41	.01 **
3. 自分は利用しているとき時間を忘れてしまうことがある	166	-.01	.86
4. 自分にとってインターネットやメールは日常生活に不可欠である	166	.14	.06
5. 自分は ICT (情報通信技術) は得意なほうだ	166	.34	.01 **
育児情報入手と子どものインターネット利用の考え方			
1. インターネット情報で育児の悩みが解決できる	125	-.10	.91
2. 育児情報の入手は信頼性に気をつけている	140	.17	.04 *
3. 育児情報は情報を得にくい	143	.07	.40
4. 自分子どもには早くから情報機器に慣れさせたい	167	.04	.55
5. 子どもに, インターネットの使用や安全性は学校と家庭で教えるほうが良い	167	.06	.41

注) Spearman の順位相関係数 * : $p<.05$, ** : $p<.01$

表 4 基礎的情報能力得点と「子どもに早くから情報機器に慣れさせたいか」賛成・反対 2 群間の比較

	子どもの早期情報機器使用		p
	賛成群 (median)	反対群 (median)	
	n=28	n=89	
基礎的情報能力総得点	116	111	.29
収集力	47	46	.52
判断力	36	33	.04*
処理力	33	32	.76

注) Mann-Whitney U 検定を実施 * : $p<.05$

表 5 基礎的情報能力得点と「子どもに早くからインターネットの使い方や安全性を学校や家庭で教えるべきか」賛成・反対 2 群間の比較

	子どものインターネット学習推進		p
	賛成群 (median)	反対群 (median)	
	n=154	n=6	
基礎的情報能力総得点	113	104	.19
収集力	46	37	.01*
判断力	34	32	.59
処理力	33	35	.37

注) Mann-Whitney U 検定を実施 * : $p<.05$

について ‘賛成群’, ‘反対群’ の 2 群に分類したところ, 「どちらともいえない」を除く 160 人中, ‘賛成群’ は 154 人 (96.3%), ‘反対群’ は 6 人 (3.7%) であった。基礎的情報能力の総得点では有意差は認めなかったが, 下位尺度の「収集力」で有意差を認め, 「収集力」が高い人は, 子どもの早くからのインターネットの使い方と安全性の教育に賛成していた ($p<.01$)。

IV. 考 察

本研究の対象となった未就学児を育てている保護者の基礎的情報能力の総得点の平均値 (標準偏差) は, 112.05 ± 17.26 点であった。先行研究において都内近郊の生徒ならびに学生を調査した結果では, 中学生 (男子 494 人, 女子 470 人, 計 964 人) 平均 104.38 点, 高校生 (男子 272 人, 女子 141 人, 計 413 人) 平均 103.48 点, 大学生男子 (137 人) 113.34 点, 大学生女子 (121 人) 109.36 点であり, 大学生男子の得点が最も高かった⁴⁾。これらと本研究の対象者を比較すると, ほぼ大学生男子の得点と同様の結果であると考えられた。同様に, 下位尺度を比較したところ, 「収集力」は本研究の対象者の平均値は最も高い得点の 45.77 点であり, 以下, 大学生の 44.23 点, 高校生の 42.84 点と続いた。上記の結果から, 今回の対象者は, 大学生と同等レベルの, 比較的高い基礎的情報能力を有していることが明らかとなった。

この基礎的情報能力は, 先行研究では, 1 日のインターネット使用量と正の相関があることが報告されている⁵⁾。本研究の結果からも, 基礎的情報能力と「インターネットの利用頻度」と「インターネット利用時間 / 日」に有意差を認めていたことから, 従来の結果と一致する結果となった。

また, 今回, 他に有意な関連が認められた項目は, 「子育ての自信度」, 主観的要因では「インターネットを上手に活用できる」, 「内容を吟味して利用できる」, 「ICT は得意なほうだ」, 「育児情報の入手は信頼性に気をつけている」に有意な正の関連性を認めた。これらの項目の関係性について, 以下に検討する。

基礎的情報能力の得点と主観的要因の「上手に活用できる」、「内容を吟味して利用できる」、「ICTは得意なほうだ」は全て情報処理活用の自己評価の高さを反映している項目であった。このことから、本研究で基礎的情報能力の得点が高かった保護者は、メディア・リテラシーが高く、加えて情報処理への自負も高い人であると示唆された。さらに「育児情報の入手は信頼性に気をつけている」にも弱い関連が認められたことから、保護者は、育児に関する情報の真偽に気をつけながら、分析的、批判的に育児情報を受け取る能力があることが示唆された。

一方、本研究における興味深い結果として「子育ての自信度」が高い対象者ほど、基礎的情報能力の自己評価点が高い傾向が認められたことである。この自信の高さは、保護者が育児に関する心配が少ない、あるいは育児不安への対処能力が高い人であると考えることができる。先行研究において、育児不安とソーシャルサポートの関係⁶⁾、育児困難と育児の知識や情報の少なさの関係⁷⁾、育児肯定感と相談利用についての報告⁸⁾がある。これらより、育児に関する情報や支援が多いほど、保護者は育児不安や育児困難感が軽減されることが示唆された。また上野らは、今の社会で育児不安に必要な支援は、父親の育児参加、地域全体での子育て支援である⁹⁾、と報告し、育児不安には内外のソーシャルサポートの充実が重要と述べている。

高度情報化社会の現在、育児に関する情報やソーシャルサポートについて、インターネットで情報を収集し、対応する方法を見出すことが可能となっている。以上のことから、本研究で基礎的情報能力が高い保護者は、育児に関連する情報を適切に収集、判断できることで育児の不安がない、すなわち子育ての自信が高い状態ではないかと考えられる。

育児に関する情報は、分析的、批判的に受け取る能力があればよいが、その能力が低い場合には、逆に不安を増大する、もしくは誤った知識を得てしまうなどの弊害もある。今後は、育児支援方略の一つとして、未就学児を育てている保護者のメディア・リテラシーのスキルアップを行う必要があるのではないかと考えられた。

次に子どもに対する情報機器、情報教育の考え方について述べる。子どもへの情報機器、インターネット活用に関する考え方の「賛成群」と「反対群」の2群間では、基礎的情報能力の下位尺度得点と関連性が認

められていた。先行研究では、子どもに情報機器、特に携帯電話などを与えることについて、コミュニケーション力の低下や健康・生活面等の悪影響の観点から多くの文献が否定的な意見を報告している^{10,11)}。しかし、本研究では、これらの報告とは異なり、基礎的情報能力の「判断力」が高い保護者は、「子どもに早くから情報機器に慣れさせたいか」は、賛成する傾向が明らかとなった。自由記載の中には「これだけの情報社会の中で生きていくためには、小さい頃から覚えて身につけてほしい」との意見をいくつか認めた。このことから、懸念される子どもへの悪影響についてのさまざまな意見は理解しているものの、それより情報機器の利便性と、子どもの将来を見据えた選択をしていることが推測された。

また、「子どもに早くからインターネットの使い方や安全性を学校や家庭で教えるべきか」の設問では、下位尺度の「収集力」が高い保護者が賛成する傾向を示した。平成25年総務省による情報通信白書でも、一般の世帯による「インターネット利用で感じる不安」として、「違法・有害情報が氾濫している」は29.7%が感じており、その不安は年々増加していることが示された。このことから、基礎的情報能力の「収集力」が高く、より多くの情報を扱えられる保護者は、子どもには、早期からのインターネットの使い方や安全性を教育する必要性を感じているのではないかと考えられた。

以上から、本研究の対象者は、メディア・リテラシーの基盤となる基礎的情報能力は大学生と同等レベルで概ね高く、特に基礎的情報能力の自己評価が高い保護者は、育児の自信が関連して高いことが明らかとなった。一方、基礎的情報能力の「判断力」が高い保護者は、子どもが早期から情報機器を扱うことに同意する傾向があることが明らかとなった。

最後に、本研究の限界および課題について述べる。今回、回収率が28.8%と低く、インターネット利用やICTに関する質問項目があることから、回答者は比較的メディア・リテラシーが高い保護者集団の可能性があるのである。そのため、本研究結果を一般化するには限界がある。今後は、さらに回答者数と回収率を高めて、保護者のメディア・リテラシーをより明確化することと、これらの結果が育児支援にどのように役立つかの検討や、子どもに対する情報機器の与え方についての詳細な検討が必要である。

本研究は、科学研究費補助金（基盤B：課題番号25293119）により行われた研究の一部である。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 総務省. 情報通信白書平成25年度版. <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/index.html> (2014.04.11アクセス)
- 2) 井田歩美, 合田典子, 片岡久美恵. 子育て情報に関する母親のインターネット利用についての実態調査. 母性衛生 2013; 53: 427-436.
- 3) 山岡テイ. 育児情報の活用意識・行動と育児不安の関連性. チャイルドヘルス 2001; 4: 934-937.
- 4) 高比良美詠子, 森 津太子, 坂元 章, 他. 情報活用の実践力尺度の作成と信頼性および妥当性の検討. 日本教育工学雑誌 2001; 24: 247-256.
- 5) 勝谷紀子, 坂元 章, 森 津太子, 他. 情報活用の実践力尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 (2). 日本心理学会第63回大会発表論文集, 1999: 1019.
- 6) 荒牧美佐子, 無藤 隆. 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い: 未就学児を持つ母親を対象に. 発達心理学研究 2008; 19: 87-97.
- 7) 清水嘉子, 遠藤俊子, 松原美和, 他. 子育て期をより幸福に過ごすための母親の工夫とその効果. 日本助産学会誌 2007; 21: 17-29.
- 8) 安藤智子, 荒牧美佐子, 岩藤裕美, 他. 幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ. 保育学研究 2008; 46: 235-244.
- 9) 上野恵子, 穴田和子, 浅生慶子, 他. 文献の動向から見た育児不安の時代的変遷. 西南女学院紀要 2010; 14: 186-196.
- 10) 野々上敬子, 平松恵子, 三浦真梨江, 他. 中学生の健康状況と情報機器の使用および生活時間との関連について. 学校保健研究 2006; 48: 46-56.

- 11) 中村晴信, 沖田善光, 甲田勝康, 他. 中学生におけるゲーム・テレビの使用と, 生活習慣, 精神・身体症状および保護者の把握状況との関連. 小児保健研究 2012; 71: 698-708.

[Summary]

This study intended to clarify the basic information capabilities which form the foundation of media literacy of parents of pre-school children, and to examine associated factors. The average basic information capability score and standard deviation of the 168 parents in this study was 112.05 ± 17.26 , to show that these parents had information utilization capabilities similar to those of university students. Particularly, the results showed that their parents with high basic information capability total scores and high information utilization self-evaluations had high levels of confidence in raising their children.

In terms of the approval of children's use of information devices and the provision of education information to children from an earlier stage, parents with high scoring under "judgment", a subscale of the basic information capability score, approved of allowing children to use information devices.

And parents with high scoring under "gathering capabilities", a subscale of the basic information capability score, approved of providing education about information to children from an earlier stage.

[Key words]

media literacy, parents of pre-school children, the basic information capabilities